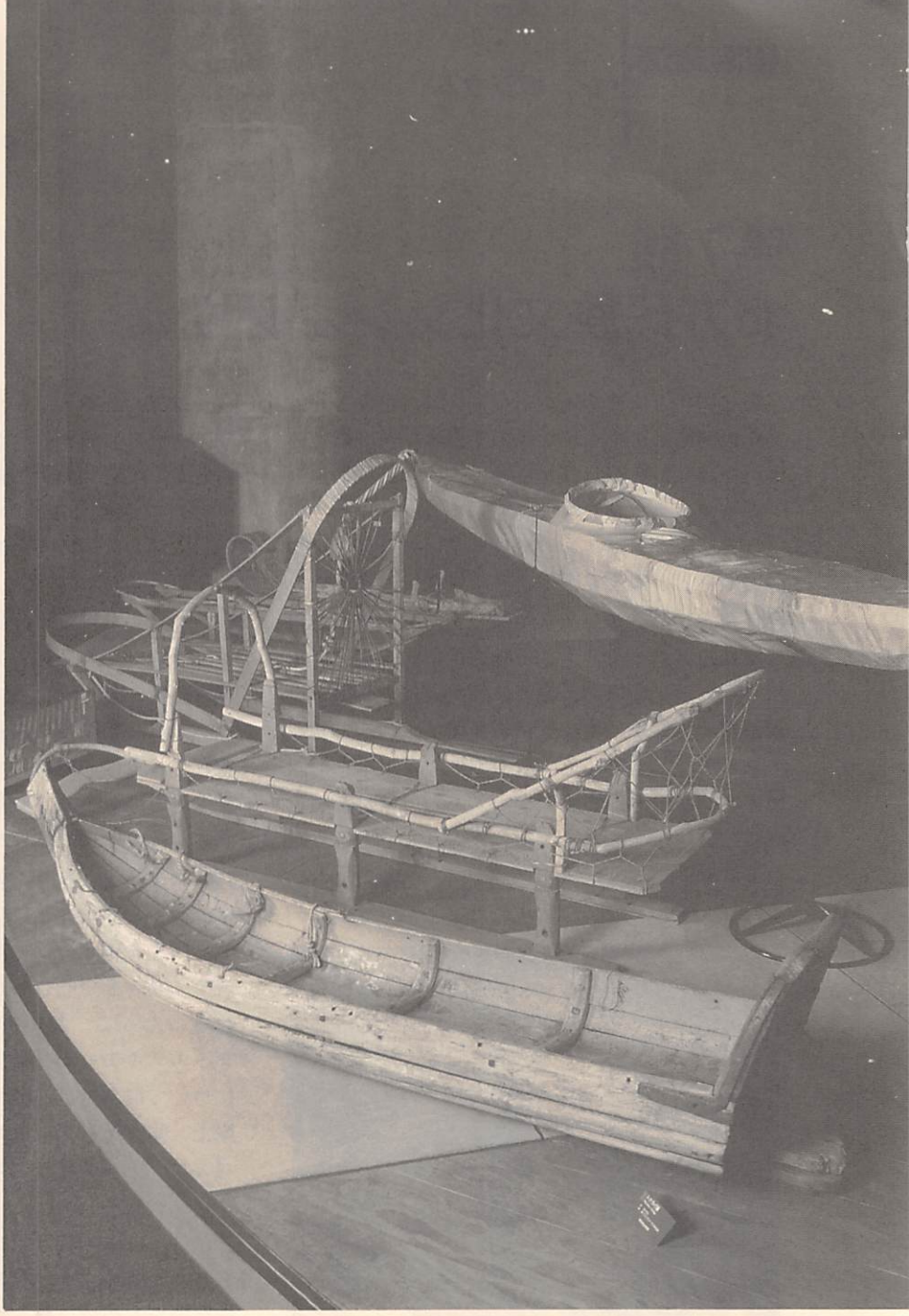
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



トナカイ橇・展示室

手　前　サミ／フィンランド・ウツヨキ地方
葛野浩昭氏所蔵
奥　　ウイルタ／サハリン

北方民族博物館だより

— 第7号 —

第7回
北方民族文化シンポジウム

第7回北方民族文化シンポジウム（主催：北方文化振興協会、オホーツク国際流氷ロード網走市実行委員会）を、11月10日と、12、13日に網走セントラルホテルを会場に開催しました。

10日は、『サハリン・ポロナイ川のカヌー探検の旅から』と題して、作家・岡村隆氏の講演会を開催しました。サハリン中部のツンドラ地帯を南に流れ、ポロナイスク（旧敷香（シスカ））に注ぐポロナイ川（幌内川）流域は、戦前、日本人による開拓の最前線でしたが、戦後は情報も閉ざされ、未知の土地となってきました。そのポロナイ川を、旧国境の北側から河口まで、日本人としては日露戦争直後の探検以来、実に84年ぶりにカヌーで下った全流域の様子を、スライドを多数用いて紹介され、また、サハリンの歴史についてもふれられました。

12、13日は『北方の精神文化における動物』をテーマとし、きびしい自然環境のもとで、狩猟やトナカイ飼育などによって生きてきた北方諸民族の自然観と世界観を、その精神文化の中の動物観を通じてあきらかにすることを目的にシンポジウムを行いました。座長は井上紘一（中部大学）、岡田宏明（北海道大学）、荻原眞子（湘南国際女子短期大学）、小谷凱宣（名古屋大学）の各氏でした。

以下に発表要旨と議論の概略を紹介します。

（発表順）

ウイリアム・W・フィッツュー氏

（アメリカ合衆国　スミソニアン協会）

『北太平洋諸民族の狩猟儀礼における芸術と図像』

芸術の重要な役割のひとつに信仰の表現がある。人間と人間の運命を操る神との関係、人間をとりまく世界との関係などを表現する役割である。狩猟文化においては狩猟者と獲物の関係、獲物とより上の神との関係、人間とマスタースピリット（自然界を支配している主）との関係が重要であった。これらの関係の調和を乱すことは、文化の存続にも、人間の存続にも、破滅的な結果をもたらすものであった。宗教儀式の主な機能や役割はこれらの関係を適切に保つためのものである。

北太平洋をとりまく地域にくらす諸民族の民族学的、考古学的文化には、人間、動物の魂、それを支配する神々の間の関係についての信仰に根づいた、動物を中心にした芸術の体系があるという論点にたって、特にアラスカ南西部のユッピック・エスキモーの狩猟芸術、次に他の民族の芸術について取り上げ比較する。

岸上　伸啓氏（北海道教育大学函館分校）

『カナダ・イヌイットの精神世界における動物―ネツリック・イヌイット社会における犬を中心に』

イヌイットの社会では犬以外の動物には霊魂があり、イヌイットと食糧となる動物の関係は相互依存的なもので、獲（と）った動物の霊魂を正しく取り扱うことによって、動物は再生し、再びイヌイットの前にあらわれるものと信じられている。

しかし犬は霊魂をもたない動物とされている。また、犬はイヌイットにとって唯一の家畜であること、犬には名前がつけられること、犬は海の女神の夫であり、かつ人類の祖先であること、などの点で他の動物とは異なっている。犬が霊魂をもたないとされているのは、霊魂をもつ他の動物の支配者は超自然的霊魂であるが、犬の支配者は人間であるという考えからきているという仮説が神話の分析から導かれる。イヌイットと犬との関係

は、他の動物と比べても特殊であり、重要で長期にわたるものであったことを神話は暗示している。

益子　待也氏（金沢女子大学）

『ワタリガラスの冒険ー北西沿岸インディアンの精神文化における動物』

北米の北太平洋沿岸に住む北西沿岸インディアンの神話は人間が語る話であっても、動物側の論理が語られている。人間の視点から話が始まり、やがて動物の視点へと認識の転換がおこり、この動物の視点が人間の視点と融合していく複眼的な視点をもっているようである。北西沿岸の人びとの精神文化では、動物と人間の間には大きな境がない。しかし、動物の世界と人間の世界は逆転しており、人間の世界ではサケの卵に見えるものが、サケの世界では糞（くそ）である。これは、北西沿岸の神話で普通にみられる逆転の主題である。

ゾーヤ・P・ソコロヴァ氏

（ロシア　ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所）

『北部シベリア諸民族の精神世界における動物ー動物崇拝研究の理論的側面ー』

トーテミズム、狩猟崇拝をもっとも基礎的なものとして考え、そこから今日まで残っている様々な狩猟民世界の儀礼や観念の再構築を試み、北方諸民族における動物崇拝の根源をたどろうとする理論的考察をおこなう。

様々な動物崇拝を比較して、それぞれの起源は異なっているということに注意しなければならない。例えば、トーテミズムの特徴は人間と動物とを同一視するという考えかた、動物の再生、それに関わる人間集団の再生に関する必要な条件を提供するという考えである。他方、漁撈（りょう）崇拝、狩猟崇拝の考え方は、人間と動物を単に密接な関係をもつものとしてとらえるのではなく、なだめるべき対象である精霊に関する概念と、獲物となる動物に対する恐れが重要であるという点が特徴になっている。動物崇拝の起源は、トーテミズムや、狩猟崇拝よりも後のものであり、動物崇拝の中にはかなり遅くに形成されたものもあると考える。

斎藤　君子氏

『シベリア民話における動物』

シベリアに伝わる民話には様々な動物や鳥が登場する。シベリア民話に登場する種々の動物の中から、人間にとって善となる動物を取り上げ、どのような動物が、どのような形で人間の生活に関（かか）わりをもつかをみて、さらにはそれらの民話の根底に流れる思想を探る。人びとは自然界との間に確かな信頼関係を築きあげ、生活の糧を得る保障にするためにこのような話を伝承してきたものと思われる。また、鯨祭りの由来を説く話が今日まで伝承されていることなどからしても、シベリアの民話が儀礼と同じ観念に根差していることは明らかである。シベリアの口承文芸において人間と動物の交わる話は自然界との絆（きずな）を強める機能をになってきたといえよう。

笹倉　いる美（北海道立北方民族博物館）

『北方民族とヒキガエルーサハリン、アムール川流域』

サハリンやアムール川流域の民族の資料には、様々な動物があらわされており、このなかにはヒキガエルやヘビ、トカゲなどの両生類、爬虫類（はちゅうるい）のすがたもみられる。

ウルフ・ドゥロビーン氏

（スウェーデン　ストックホルム大学）

『オーディンと動物変身』

古代スカンディナビアの宗教は残された文献から、オーディン神と戦場での英雄的行為を中心とした勇士の宗教であることが知られている。

古代スカンディナビアの宗教の中で動物は重要な役割をはたしている。宗教の中での動物の観念はワールドツリー（世界樹）とオーディン神に関連したものである。オーディンは、自ら動物に変身し、生と死、過去と未来を超越した世界へ移動する。こうした宇宙観はシャマニズムと人身供犠の原形になっている。また、オーディン神の信仰に関していえば、戦場で殺されたものはオーディンへの犠牲とみなされる。このため、死体を食べるワタリガラスは、オーディンの鳥であり、オーディンの変身の姿の一つと考えられる。古代スカンディナビアの詩の中で、ワタリガラスはとても重要な象徴として記述されている。また、古代の英雄はオオカミやクマの特徴をもったものとして表現されている。動物への変身と神々の世界の関わりを具体的に提示する。

前田　潮氏（筑波大学）

『北欧の岩壁画と鹿崇拝』

人類の歴史の中で、鹿（しか）と人間の関係は、単に食糧源としての狩猟対象と狩猟者という関係にとどまらないことは、多くの事例からも知られている。北欧では後期石器時代の後半以後青銅器時代を経て岩壁画が発達した。この岩壁画にあらわれるのは人物、オオシカ、ボート、幾何学模様などであり、とくに人物とオオシカの像が多い。人物とオオシカの表現のされかたから、食糧源としての動物の増殖儀礼に関わるものであると考える。そして岩壁画は、儀礼の場面の「定着」を試みることで、儀礼の精神の持続をはかったものと思われる。

佐々木　利和氏（東京国立博物館）

『アイヌ絵にみる動物』

アイヌの生活そのものを風俗画的に描いたアイヌ絵からは、アイヌがその生活のなかでどのように動物を利用しているのかを見ることができる。

アイヌ絵を資料として利用する場合には、和人のフィルターを通して描いていること、偏見によるイメージの定着化、嘘（うそ）が描かれる場合があることなどに留意する必要がある。

アイヌの始祖説話の一つである犬祖説話と、動物が描かれたアイヌ絵から失われた伝承を復元的に考える資料をみいだそうとする視点の二つからアイヌ絵を見る。

総合討論では発表の補足につづいて、トナカイ飼育などの生業形態の変化が精神世界に与える影響、毛皮交易、キリスト教のインパクト、霊魂の問題、今後の研究課題などについて非常に活発な議論が展開されました。

（学芸課　笹倉　いる美）

○平成４年度第４回講習会

北方の口琴の源流をもとめて－ムックリはどこからきたか－

講師／日本口琴協会　直川　礼緒　氏

口琴－こうきん－という耳慣れない、しかし世界に広く存在する楽器についての講習会が、11月29日に開かれました。講師の直川（ただがわ）氏は、「音の出るもの」の形や背景に興味を持ち、アフリカや東南アジアなどを回ってこられましたが、近年は自ら協会を設立し、国際口琴大会など旧ソ連で行われた数々の催しに参加されています。講習会はまず、口琴の音を聞いてもらう意味で、サハ（ヤクート）の金属製のホムスの演奏から始まりました。以下に、概要をご紹介します。

口琴は、弁を指で弾いたり取りつけられた糸を引いたりして振動させ、口の中で音を反響させる楽器である。シベリア、ヨーロッパ、パプアニューギニア、インドなどユーラシア大陸全体とオーストラリアの一部に存在するが、アフリカや南北アメリカ、オーストラリアのアボリジニにはない。今回はアイヌのムックリに焦点をあててみたい。

ムックリは、江戸時代のいわゆるアイヌ絵に多く描かれており、現在の物と比べて形の変遷などをうかがい知ることができるが、明らかに間違っている絵も少なくない。しかし、記述の中に「本邦ビハボンなるべし」など、本州でのこの楽器の存在を示すものがあり、実際江戸時代に流行し、禁止令が出た事実がある。埼玉からは、平安時代のものとされる口琴も発掘されている。

現在の竹製ムックリの中央の弁は、肩のようになだらかに先端に向かって細くなっているが、これは糸鋸（いとのこ）など製作する道具（刃物）の発達によるものらしく、古い資料では肩の部分が直角である。

ムックリと同じタイプの、竹製あるいは木製で弁に糸のついた物は、極東はもちろんトゥーヴァなどの中央シベリア、ケットやハンティなどの西シベリアにまで広がっている。

金属製の口琴、アイヌ語でいう「カニムックリ」の仲間を見ていくと、これもさらに広範な地域で使われている。形はだいたい似ているが、弁の先端の角度などが、それぞれの民族によって異なっている。その弁を保護するために工夫を凝らし、独自の美しい装飾を施した入れ物が作られており、口琴と同時に興味をそそるものである。

アイヌ絵には、カニムックリを演奏するときにまさかりを肩に載せ、その刃の部分に音を反響させるという方法が描かれている。松浦武四郎は、同じ方法をウイルタの例として描いており、現在には伝わっていない使い方である。

アイヌ以外の民族でムックリと似た名称を持つ口琴は、ウイルタの「ムックナ」「ムヘネ」、ウリチでも「ムヘネ」、ナナイの「ムエニ」、ダフールの「ムクリエン」、錫伯（シボ）や満族の「モケナ」「モクニ」など、サハリンから中国東北部にかけて分布する。しかしこれらは金属製の口琴を指す言い方で、竹製の物は異なる名称を持つ。また同地域でありながら、ニヴフで「ザーカンガ」、ヘジェンで「コンカンジ」、ウデヘでは「クンカイ」など金属製でもムックリとかけ離れた名称もある。

名称を比較してみると、モンゴルで楽器全体を指して「フール」といい、ブリヤートでは口琴を「フール」というため、「ムックリ」や「トンクル（五弦琴）」などの語尾の「ウル（ur）」はここからきているのではないか、「ムックリ」はアイヌ語でなく外来の言葉ではないかという仮説を立てている。言語学的にも調べる価値がありそうだ。

'93年には口琴の復興運動が盛んなシベリアのサハ共和国から、演奏者を日本に招待する計画がある。日本でも関心が高まって欲しいと願う。

国際口琴大会に出場されたアイヌの方３名による演奏も聞くことができ、60名を越える講習会の参加者は熱心に聞き入っていました。

○平成４年度第３回講習会

北方民族の有用植物

講師／齋藤　玲子（当館学芸員）

この講習会は、昨年春に行なった同タイトルの「秋編」として10月4日に実施しました。

講習会では、おもに秋に採集可能な植物について実物を見ながら解説し、そのあと実際に野外において観察を行ないました。

北方民族は限られた種類の植物から果実などをとり、それをそのまま食べたり、果汁を集めて酒のようなものをつくって飲み、あるいは乾燥して冬季間の食料にしていました。今回は、とくにアイヌの人びとの植物利用に焦点を当てました。

北方、積雪地域の中でも南に位置する北海道は植物資源の豊かなところといえます。アイヌの人びとが認識していた植物の数は400種以上もあり、そのうち、食用としては120種を越えるといわれています。

アイヌの食生活は、狩猟・漁撈に頼ったものだったようです。しかし、かなりでん粉質を食生活にとり入れていました。ユリの仲間などの根やカシワ、ナラ、あるいは湖に生えるヒシの実などからとったでん粉は、だんご、かゆのようにして食されました。これら以外として、ヤマブドウ、コクワ、マタタビは、そのまま食べられたり、これを発酵させて酒をつくりました。ハマナスはそのままで、あるいは乾燥させて保存食とされました。また料理の香辛料として使われたものにキハダの実があります。

以上のようなレクチャーのあと、会場を博物館周辺の山林に移して、食用となる木の実、ヤマブドウなどがどのようになっているのかなどを観察しました。

○平成４年度第３回講座

北方の橇とかんじき

講師／渡部　　裕（当館学芸課長）

北方地域の橇、かんじきには地域や文化の違いからさまざまなタイプがあります。12月13日のこの講座ではそれらを概観して自然環境にどのように適応してきたかをお話しし、その後展示室に行き資料を解説しました。以下はその概要です。

重量物を運搬あるいは、移動生活をするために使用された橇。手でひくものもありますが、多くは動物にひかせます。

イヌ橇：イヌイトの橇は、滑走板のうえに板を乗せるタイプで、牽引する犬たちは、扇形に広がるようあるいは縦長に並ぶように繋がれます。アジア極東の諸民族では、滑走板に支柱を立てその上に板を載せるタイプの橇が用いられていました。基本的には雪や氷がある時期に使用されます。

トナカイ橇：はじめは狩猟のための移動手段として、その後荷物の運搬に使用されました。西シベリアでは、大規模トナカイ飼育のもとで発生した大型橇が、雪がない期間でも使用されています。スカンディナビアのサミの橇はボート形で、竜骨にあたる面が滑走面となり、トナカイ１頭びき。

橇と関係が深いものにかんじきがあります。これにはさまざまなタイプがあり、大きくは木枠にネット状の紐かけをしたものと、スキーのように板状のものがあります。前者は北アメリカとベーリング海峡を挟んだチュコト半島、カムチャツカ半島地域で用いられ、平面が円形、だ円形、長円形といくつかのタイプに分けられます。後者はユーラシアで広く用いられ、アザラシやトナカイ皮を滑走面に貼っています。橇、かんじきは、積雪地帯での移動や狩猟活動において極めて有効な道具です。

調査概報

第1回海外民族調査

11.21～12.20

はじめに

当館では開館以来、国内の博物館、大学などの協力のもとに、北方諸民族に関するさまざまな情報を得て、博物館活動をおこなってきました。しかし一方で、イヌイト（エスキモー）やシベリア諸民族に関する実物資料、写真・映像資料については、日本国内よりも北方圏諸国の博物館、大学、研究施設などが圧倒的に多く所蔵しているのが現状です。

このたびの第1回海外民族調査では、北方民族の中でも北アラスカのイヌイトに焦点を絞り、アメリカの博物館、大学が所蔵する実物資料の調査とそれに付随するデータの収集を中心としました。

調査の成果については、ただいま整理を進めているところですが、以下に調査概要と、訪問した五施設のうち特にフィールド自然史博物館（シカゴ）について紹介します。

調査日程と訪問施設

11.23（月）～11.27（金）

アンカレッジ歴史美術博物館（アラスカ州）

・収蔵資料調査（8点）

ノーススロープ郡歴史・言語・文化センター（バロー、アラスカ州）

・収蔵資料調査（10点）

11.30（月）～12. 4（金）

アラスカ大学博物館（フェアバンクス、アラスカ州）

・収蔵資料調査（72点）、写真・映像資料調査

12.7（月）～12.11（金）

スミソニアン国立自然史博物館（ワシントン，D.C.）

・収蔵資料調査（93点）、写真資料調査

12.14（月）～12.17（木）

フィールド自然史博物館（シカゴ、イリノイ州）

・収蔵資料調査（97点）

収蔵資料の調査では、イヌイトの実物資料のうち、なべ、石ランプ、皿、さじといった住居内で使用した資料を中心としました。

フィールド自然史博物館について

この博物館は、1893年にシカゴで開催された世界コロンビア博覧会の際に、デパートを世界で最初に考案したといわれているマーシャル・フィールドによって作られました。収蔵資料は、今回調査した人類学関係のほか、動物学、植物学、地質学から構成されています。人類学では、1階の東側がアメリカの先住民であるイヌイトとインディアンのコーナーであり、展示の柱の一つになっています。またこのコーナーには、当館のものとは異なるタイプのイヌイトの竪穴（たて）住居復元があり、来館者から注目されています。

資料の調査では北アラスカからベーリング海峡にかけてのポイント・ホープ、コツェビュー湾、ポート・クラレンス、ノームといった地域から、1900年代前半に収集された資料を対象としました。どの資料も保存状況がとても良く、また資料管理が行き届いていることに関心しました。特にコツェビュー湾のものは、生業に関する道具が網羅的かつ体系的に集められており、ぜひまた近い将来、資料調査をしてみたいコレクションの一つでした。

（学芸課　佐々木　亨）

フィールド自然史博物館収蔵庫内のイヌイト資料

博物館外観

コレクション・マネージャーのグレウ＝マリンズ氏

参加報告

人類学・民族学連合大会
国際シンポジウム

連合大会が吹田市の大阪大学で開催されました。人類学の研究発表のなかから、当館に関連の深い研究を紹介します。

●「数種北方民族集団の集団遺伝学的研究1－エベンキとブリアート」石本剛一氏（三重大学）、鈴木広一氏、松本秀雄氏（大阪医科大学）

人類学会の中心的課題の一つに日本人の起源の問題があります。この問題は従来、骨の形態的特徴や計測値をもとに自然人類学的な立場から論じられてきました。松本氏を中心とする研究グループは、血液中のＧｍ型遺伝子に注目した新しい視点からこの課題に取り組んでいます。Ｇｍ型遺伝子は、いわゆる肌の色による人種の違いが識別できる血液型であり、これを分析することにより違った人種との混血の割合、民族の移動の歴史などさまざまなことがわかってきました。

今回の発表では、今まで採血が大変困難であった旧ソ連における事例が報告されました。ロシア科学アカデミーシベリア支部との共同で、東部シベリアの村においてエベンキ、ブリアートから採血をし、374例の試料を得ました。それらのGm型遺伝子に注目したところ、いずれの民族集団も蒙（もう）古系を特徴づける因子をもち、「北方型」の特徴を示していることがわかり、日本人の起源の問題に今後あらたな視点を提供すると考えられます。

また、北方に関連する次の民族学の発表がありました。●「民族補鯨」平口哲夫氏（金沢医大）●「ネツリック・イヌイットの漁撈」スチュアート　ヘンリ氏（目白学園女子短大）●「生活時間を通してみるカナダ・イヌイット社会の変化」岸上伸啓氏（北海道教育大）●「カナダ・ニシカ族の教育について」渥美一弥氏（横浜外語ビジネスアカデミー）●「北米大陸北西海岸インディアンの象徴的図像における形態認識」大村敬一氏（早稲田大）「アイヌ集落における人口および家系別人口の推移」葭田光三氏（日本大）

（学芸課　佐々木　亨）

第46回日本人類学・日本民族学連合大会
10.24,25 於：吹田

1993年の国際先住民族年に向けて、北方地域各国の映像作家をパネラーとした国際シンポジウムが、下中記念財団の主催で行われました。標題にもなっている「大きな文化」とは多数派民族（マジョリティ）の、「小さな文化」とは少数派民族（マイノリティ）のそれを指していますが、ここでは社会変動の厳しかった20世紀を同時に動く映像の100年として、抑圧されてきた少数派諸民族の文化について多くの映像作品をとおして語られました。

アラスカ大学博物館からは、L.カマリング氏が『アラスカの伝統エスキモー文化に関する映像記録』と題して、エスキモーの人びとの協力による文化保存のための映像制作について紹介されました。カマリング氏はまた、大変な親日家でもあり、「他の文化について学ぶとき、自分自身を見つめ直すことができる」といい、それは現代を生きる人間として欠かすことのできない視点だと述べられました。

カザフスタンからは、ヴァドル（ユカギール）人の映像作家Ｖ．パルフョーノフ氏と朝鮮人であるＬ．ソン氏が、滅びゆく文化の記録と、揺らぐ旧ソ連社会のなかでの少数派民族の権利獲得運動の高まりなどを紹介しました。ことに、ソン氏の熱弁に対して多くの賛同と質問が寄せられ、朝鮮人の強制連行が日本の身近な問題として、受けとめられていることを強く感じました。

また、日本からはオーガナイザーである岡田一男氏が萱野茂氏の協力でまとめた『アイヌの信仰と祭祀（さいし）－ウェポタラー』が、N.G.マンローの撮影した1933／34年から実に60年ぶりに一般公開されました。萱野氏に対しても、会場からは質問が続出しました。

貴重な映像と、公の場でなかなか聞くことのできないパネラーの熱のこもった発表に、内容の濃い1日でした。また、東京で行われたこのようなシンポジウムに、多くの関心が寄せられたことは、少々驚きでもありました。（学芸課　齋藤　玲子）

大きな文化は小さな文化から何を学べるか？
11.17 於：東京

Q&A おしらせ

Q 展示室に舟に似た見慣れない形の橇(そり)がありますが、他の北方民族の橇も含め、橇の形の違いや牽引(けんいん)動物について教えてください。

A 舟型の橇は、スカンディナビアに住むサミの伝統的な橇です。この一見奇妙な形の橇は1頭のトナカイで牽引され、舟の竜骨にあたる中心部分が他の底面材より数cm厚く、滑走板の役割をもっています。しかし19世紀頃から2本の滑走板をもつ橇が普及し、舟型橇はしだいに使われなくなりました。

北方地域の初期の橇は、人や少頭数の犬によって牽引されたと考えられています。北アメリカでは2本の滑走板をもつ橇や板状の橇“トボガン”が使われ、ヨーロッパ人との接触以前には犬以外の家畜が存在しなかったため、もっぱら犬が橇引きに利用されてきました。ユーラシアでも2本の滑走板の橇が中心で、犬やトナカイが利用されていました。橇犬の飼育頭数は確保できる餌(えさ)量の制限を受けるため、魚が豊富な地域をのぞくと多くはなく、ユーラシア北部ではトナカイ飼育文化が拡散する過程で、犬から餌の確保が容易なトナカイへと牽引動物の転換が行われたと考えられています。

（学芸課　渡部　裕）

Q 一番最初に展示されている細石刃(さいせきじん)と細石核とはどのようなもので、どの地域に分布しているのですか。

A やじりや土器がまだ人類の歴史に登場する以前、旧石器時代。これらはその終末を代表する遺物で、細石刃とは幅が1cm以下、長さが数cmの剥(はく)片で、骨や角で作った棒の側縁に刻んだ溝にかみそりの刃のように植え込み、槍(やり)のような狩猟具として使用されました。一定の大きさの細石刃を生み出すためには、そのもととなる母材が必要とされ、これが細石核とよばれるもので、あらかじめ舟形、円錐(すい)形に整形されたものが用意されたのです。この特徴ある石器文化は、いまから2万5千年前ころにアジア大陸の内陸に発生し、徐々に周辺へと広がりを見せて、日本には1万3千年前ころ、ベーリング海峡を挟(はさ)んだアラスカにも1万年前以降に現れます。人類が低緯度温暖な地域から、寒冷地域である北方への拡散・進出を果たしたことを知ることができる貴重な資料といえるでしょう。

（学芸課　青柳　文吉）

'93.2～3の行事

・2/9～3/21 第5回特別展
「マヤ　－歴史と民族の十字路－」
‡特別展は別途観覧料を申し受けます

・2/21 第2回講演会
「新大陸の古代文明と人びと」
講師　大貫　良夫　氏(東京大学)

・3/7 第5回講座
「アイヌ考古学」
講師　宇田川　洋　氏(東京大学)

前回おしらせしていた第5回講座が3/7に変更になりました。

講演会、講座はいずれも午後2時から当館講堂にて開催します。参加は無料です。内容の詳細やお申し込みについては、博物館まで電話でお問い合わせください。

第5回特別展

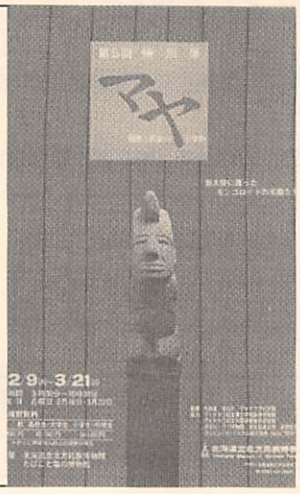
マヤ　－歴史と民族の十字路－

平成5年2月9日（火）～3月21日（日）／休館日　月曜日、2月16日、3月20日

一　　般	高校生・大学生	小学生・中学生
250(200)円	80(50)円	50(30)円

かっこ内は10人以上の団体の場合

数万年前にシベリアからアラスカをへて新大陸に移動した人類集団は、南北アメリカ全体に拡散し、それぞれの自然環境に適応していきました。なかでもマヤをはじめとするメソアメリカ地域と中央アンデスに住み始めた人びとは、植物の栽培に基づいて、新大陸の二大古代文明圏を築きました。今回は、コロンブスの到達以前にくりひろげられたマヤの古代文明と、今日まで受け継がれてきた伝統文化の一端を紹介します。



News

執筆者ならびに出版社から贈呈をうけた書籍（10月～12月）

阿部敏夫編著『北海道の「口承文芸」ー和人文献目録ー』サッポロ堂書店 1992

大林太良『正月の来た道』小学館 1992

クライトナー,G .著、大林太良監修、小谷裕幸、森田明訳『東洋紀行2』平凡社 1992

大林太良他編『海から見た日本文化／海と列島文化10』小学館 1992

ソコロワ,ゾーヤ著、本荘よし子訳『北の大地に生きる』国際文化出版社 1987

谷本一之、森田稔『エスキモーの歌と踊り／地球の音楽66』日本ビクター 1992

谷本一之『ツンドラと氷原を渡る響き／地球の音楽67』日本ビクター 1992

Соколова,З.П. Эндогамный ареал и этническая группа, Академия наук СССР 1990

主な来観者

10/ 3　斎藤裕嗣氏(文化庁文化財調査官）他2名

10/ 5　菅豊氏(国立歴史民俗博物館助手）他２名

11/ 6　J.ウィルキンスン氏（スコットランド国立博物館）

11/28　K.ミッシェル氏(ニューヨーク在・ラジオプロデューサー）夫妻

12/12　辻井達一氏（北海道大学教授）他2名

12/25　山口敏氏（国立科学博物館）他2名

観覧者動向 10月～12月

10月	3,558名
11月	1,633名
12月	786名

みんぞくこうこはくぶつかん in Hokkaido（10月～12月）

10/19　日ロ交流の出発点、あすラクスマン来航200年・上陸地根室で多彩に記念行事／Y

10/24　「世界の先住民のための国際年とアイヌ文化の夕べ」（北海道主催）札幌で開催／M

10/24　道開拓記念館、アムール下流で鈴谷(ススヤ)式土器発掘・交流2000年前から？／D（夕）

10/27　「アイヌ民族についての連続講座」(北教組主催）スタート／D

10/27　「コタンに生きる・秋」連載開始／AS

11/1　樺太アイヌ史研究会・強制移住史『対雁の碑』を出版／D

11/4　聞き書き集大成『アイヌの食事』（農文協）近く刊行・樺太からも具体例／D

12/2　知床博物館・サハリンの生活道具、ポロナイスク博物館から寄贈／AB

12/3　縄文人も火葬で埋葬　余市の大川遺跡、30基も大量出土／D

12/8　「国際先住民族年とアイヌ民族の人権」シンポ(アムネスティなど合同主催）／M

12/9　現代と融合「アイヌ詩曲舞踊団モシリ」全国公演スタート／M

12/9　釧路市ウタリ共同作業所が完成伝統木彫や民芸品作り・後継者養成にも活用／AS

12/9　「守りたい民族性と自然」さっぽろ北方圏映画祭シンポジウムから／D（夕）

12/11　青森にもオホーツク式土器・本州で初確認、本道との交易裏付け／D

12/23　旭川チカップニ・アイヌ民族保存会、アイヌ民族の楽器トンコリ作り講座が始まる／AS

＊ＡＢ網走新聞
ＡＳ朝日新聞（道東北網版）
Ｄ　北海道新聞（オホーツク版）
Ｍ　毎日新聞（道東北版）
Ｙ　読売新聞（北網版）

そのほかの主な行事

10/17～18　文部省科学研究費補助「環極北文化の比較研究」第4回シンポジウム当館講堂を会場に開催

12/27　「ロビーコンサート'92 青少年のための室内楽の夕べ」山田記念青少年育成財団と共催で開催

編集後記

元日の新聞では、各紙で国際先住民年を意識した特集を組んでいた。さかのぼって10月頃から、関連のシンポジウム、研究会、展覧会などが多く開かれており、前コーナーでは本道以外での記事を紹介しきれなかった。

この１年で何がどう変わるかわからない。しかし、マスコミに取り上げられることによって、「民族」「文化」などの言葉が広く多くの人の目に触れるのはいいことに違いない。本来の意味にしっくりこない「先住民族」「少数民族」などの日本語や、その定義を考え直すきっかけになるのではないか。

北海道の新聞で「アイヌ」の文字を見ない週はない。（齋藤）

北方民族博物館だより
— 第 7 号 —
1993年 1月25日発行

北海道立北方民族博物館
〒093 北海道網走市字潮見313－1
TEL 0152－45－3888